

Title	百年、畢竟、これ行旅：桐生の詩人・佐羽淡斎の「総宜楼」詩碑をめぐって
Sub Title	Life is but a journey toward illusions and dreams : some considerations about SOUGIRO, the Chinese poem written by Tansai Saba, a literary patron and poet born at Kiryu in late Edo period
Author	新谷, 雅樹(Shinya, Masaki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2012
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.102, (2012. 6) ,p.21- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01020001-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

百年、畢竟、これ行旅

— 桐生の詩人・佐羽淡齋の「総宜楼」詩碑をめぐる —

新谷 雅樹

一

武州金沢八景が雅遊の地でなくなつてから、すでに久しい。

昔から金沢八景の眺望は、能見堂から眺めるのが一番だとされていた。『新編鎌倉志』卷之八にいう、「能見堂は、称名寺の西北の山上にあり。里俗はのつけん堂と云。昔し、画工巨勢金岡、此所の美景を写さんとして、あきれて、のつけにそりたる故に、のつけん堂と云ふなり」と。あの宮廷画師の金岡でさえ、写生の筆をつい取り落とし、ただ絶倒するばかりで、彩管の神変をふるう余地もなかったというのである。もちろん、これは俗伝にすぎまいが、ユーモラスである。昔の人は洒落にも平安朝の画師を引き合いに出す。奥ゆかしい風儀である。だがしかし、それも大昔のことであつて、詩にも作られ、歌にも詠まれた八景の眺望絶佳は、商業ビルやらマンションやらに邪魔されて、いまや見る影もない。

言うまでもないことだが、金沢八景は中国の瀟湘八景にちなむ。元禄の頃、東臯心越禪師（明の渡来僧）が能見堂に笈をとどめたおりに、眼下に広がる風光明媚に打たれて、八勝の準擬を為すとともに八詠を賦した。いわく、「洲崎晴嵐」「瀬戸秋月」「小泉夜雨」「乙臚帰帆」「称名晚鐘」「平潟落雁」「内川暮雪」「野島夕照」と。この準擬・八詠によって、わが金沢八景の勝目はほとんど不動のものとなって、今日まで伝承されてきた。

さらに、これと軌を一にして京極無生居士が、禪師の八詠と対になるようにして八首の歌を添えた。こうすれば、「漢」の八詠と「和」の八首を、左右に見ながら吟唱することができる。このいわば「漢和朗詠」の様式が、八景探勝に訪れた詩人・歌人の文雅の嗜好にかなって、八つの勝目をさらにゆるぎないものにした。

この両様の詩歌は感吟に値するものとして後世に伝えられた。『金沢八景案内子』『金沢八景詩歌案内子』といった小冊子が能見堂から繰りかえし発行され、吟杖をひいて訪れた詩人や歌人の枝折となった。そして江戸の後期になると、『江戸名所図会』にも禪師の八詠が収録されて、「名所として」の八景の値打ちをいっそう高めた。

江戸後期の特徴の一つは、上下一般に行楽が好まれたということである。四季折々に各所の郊外に出遊しては、花に酔い月に眠って一兩日の歓をつくす、というのが一般的風潮だった。漢詩では、これを「郊行」ともいい、「郊遊」ともいい、「出郊」ともいう。田中道雄氏の「郊行散策の流行」によると、江戸後期に「郊行漢詩」の盛行が見られたという。例えば『劔南詩稿』（陸游）や『石湖詩集』（范成大）などに、いうところの「郊行漢詩」をしばしば見かける。文化文政期の漢詩人は、南宋三大家の陸游・范成大・楊万里の詩をことのほか重んじたから、この流行には三大家の影響が強く働いたと見ることができる。ちょうど唐詩にかわって宋詩が鼓吹されていた時期で、とりわけ范成大的『四時田園雜興』六十首は広く読まれて、江戸の文人墨客たちの田園に対する憧憬をかきたてた。ゴミゴミした市井小巷を飛び

だして、吟行に励むという実践が重んじられたわけである。あるいは陸游の「村村皆画本、处处有詩材」（舟中作）という詩句に触発された結果だと言ってもいい。

元禄の昔、明の渡来僧によって明確に発見された景勝の地は、化政期以後になると、江戸の人々の恰好な郊遊の地となる。金沢は江戸から比較的近く、保土ヶ谷宿で一泊すれば難儀なくゆける。馬や駕籠に頼るなど、吟行においては論外である。徒歩で品川を発つや、美しい田園の風景が開けて、身に染みついた都塵も、みるみる清められていく。こうして「自らの足による歩行の喜び」^三が、我と我が身をもって感じられたのである。

二一

おそらく文化年三年以前のことだろう、瀬戸橋の近辺に「東屋」という旅亭が店を構えた。そう推定できる根拠は後に示すことにして、その前に前田元重氏の研究^四を把握しておこう。それによると、享保十六年版の「八景安見図」では、「東屋」はまだ描かれてはいないが、文政十年版の「武州金沢擲筆山地藏院能見堂八景之画図」から、「秋月」「千代本」とともに描かれるようになり、以後の版には必ず載るようになったという。念のため言いそえると、秋月も千代本（現存）も、瀬戸橋の近くに開店した同業である。

そういえば、江戸の国学者・小山田与清もここに泊まったことがある。与清の『擁書楼日記』の文政二年五月二十五日に以下の記述がある。「金沢なる東屋といふ旅宿を出て瀬戸を渡り、濃見堂にのぼる、こゝもとよりは、金沢八景よく見わたせたり」与清は蔵書五万巻をほこる碩学で、加えて江戸の豪商でもあったから、「旅宿」とはいえ、普請といひ接待といひ評判といひ、江戸の富商が泊まるにふさわしい料亭旅館であつたに違いない。

いや、実をいえば、東屋の存在はすでに江戸の文人雅客たちの間で相当に知られていた。これについても後で述べることにするが、いま言っておかなければならないのは、おそらく文政十年までには、秋月も千代本も参入して旅館経営をしなければ手に負えないほど、諸方からの客が急増したということである。いきおい旅館どうしの競争が始まる。つまり「名所」の大衆化が始まったということである。それが証拠に、後の「金沢八景略図」（木版色刷）の類いをのぞいて見ると、だいたい三軒の旅亭が描かれている。まるで旅館早見図のように、これが東屋、これが秋月、これが千代本というふうには、一目で見分けられる形で描きこまれているのである。大衆受けするのも道理だろう。

東屋はもちろん、千代本も秋月も場所どりが素晴らしい。「瀬戸秋月」の勝目で有名な臨海の一帯いいところに出版していたので、当然、商売は繁盛を極めただろう。おしなべて化政期は天下泰平の閑暇を持って余した結構な御時世である。太平を歌唱し、山水を吟詠する幽人韻士はいくらでもいた。これに狂歌師・俳諧師の類いまで加えたら、もう佃煮にするほどいた。そういう風流人がどっと押しかけたのである。

もともと心越禅師と無生居士のお墨付きの名勝であるうえに、八景の山環水聯の景観は江戸では拝めないものである。实地にこれを望めば、山の木々が光彩に輝き、海の波音が歓喜を歌う。これはもう肺腑に吸いこむしかない。とたちまち、詩意画情が胸臆にあふれたに違いない。画家・鐫木清方の随筆「金沢八景」を読むと、東屋には大窪詩仏の扁額、亀田鵬齋・酒井抱一・谷文晁の墨蹟が残っていたという。四人はいずれも当代一流の文人墨客たちで、八景探勝に訪れた四人のご最良にあずかるほど東屋は名旅館だったらしい。

それにしても他店を押さえて、東屋が一頭地をぬいて評判をとったのはなぜか？

第一に、ここの店構えである。これは幸い、『江戸名所図会』^五について見れば分かる。『図会』巻之二「天璇之部」所

載の挿絵「瀬戸橋」「其二 旅亭東屋」こそ、当の東屋にはかならない。絵師・長谷川雪旦が二枚続きでその盛況ぶりを描いているが、ここには宴会場あり、二階建ての母屋あり、離れありで、おりしも宴会場では酒宴が催されている。酒肴は大皿に盛られた鯛の活き造り——八景探勝には、このように口福の快樂を満喫するという面もあつたわけである。これに加えて、画面の上下にもやもやと雲が棚引いているが、これはここが仙界であるということを示している。ひと口に風流韻事というが、これには玩山遊水や詩酒徵逐はもちろん、男女交歓も含まれている。してみると、そろそろ旅亭東屋の正体が見えてきたようである。(「図会」は天保年間刊。東屋は文化年間よりも、商売の規模を拡大していたかもしれない)

第二は、ここからの眺望の素晴らしさである。これについても幸い、絵が残されている。歌川広重の『武相名所旅絵日記』である。嘉永四年の夏、広重は井上文雄(国学者)・武谷機子(武家の妻)、それに氏名不詳の女をともなつて、江戸・箱根間の周遊の旅にのぼつた。そのとき名所名所を訪れて写生した画稿を集めたものが、この『旅絵日記』で、その第十一景がほかでもない「旅亭東屋より眺望」という絵である。見開き二枚の画(二三・二五八・四センチ)であるが、その布局色彩の妙、感嘆のほかない。まず目に飛びこんでくるのが平瀉湾の眺望で、つぎに目がいくのが開けつぷろげな二階の座敷にいる、男女二人である。この浮き立つような開放感——女(機子)は海に張り出した縁の欄干にもたれたまま絶景に見とれている。その後ろにたらずんだ男(広重)は画筆・画帖を手にしてスケッチに余念がない。二人の目路に控えている山明水媚の自然は、おっとりとした寛容に見える。この嬉戯感は何だろうか? 金沢八景本来の山情水性によるものなのだろうか? それとも広重自身がいう「戯筆」のお手柄だろうか? いずれにしろ、東屋の客は二階の座敷にさがりさえすれば、八景の展望を我が双眼におさめて、心ゆくまで堪能することができたわけである。

そして第三は、前出の大窪詩仏書の扁額である。ここでもう一度、『江戸名所図会』の「旅亭東屋」の挿絵にもどると、宿の入り口の門柱に「東屋」という看板が掛けられ、母屋の二階の軒下に「四時総宜之楼」という扁額が掲げられている。しかし東屋は、安政五年の瀬戸大火の際、類焼を被っているというので、火のつきやすい木材など、とうの昔に烏有に帰してしまっただろうと思っていた。だから、清方がいう「詩仏の扁額」などが、残っているはずがないと思っただけである。(東屋は大火後、近所の洲崎に所を替えて営業していた。しかし昭和三十年に廃業。今は跡地に第一生命横浜金沢ビルが建っている)

ところが、その実物が神奈川県立図書館に所蔵されているというのである。偶然、これを知って、早速、同館に赴き、一覽を願ひ出た。やああって運び出された実物は、長くお蔵入りになっていたようで、嚴重に梱包されている。包みが解かれると、時代のついた扁額が現われた。見ると、「四時総宜之楼」と彫りこんである。自題には「文化丙寅春与／緑陰庵竹庵／同宿此楼因書／而与之／詩仏居士□(落款「行／天民」陰文方印)」（詩仏は名は行、字は天民）とある。文化三年の春、大窪詩仏は山本緑陰・市河米庵・福田竹庵とともに、この楼に遊んだので、これを縁に自分の書を贈るというのである。二百余年もの時をしのいで、よくぞ残ったものだと瞠目させられた。

詩仏は当時屈指の有名詩人。緑陰は山本北山(儒者)の子で、家の学を継いだ。米庵は市河寛齋の子で、書家として有名である。竹庵は国学者であるが、漢詩もよくしたという。おそらく同年の一月か二月かに、四人は連れ立って「春郊」を試み、八景探勝に地の利を得た東屋に泊まって、酒間に韻を闘わせたのだろう。その際、詩仏が——「東屋」ではいかにも和臭がして詩にならないので——唐めいた「総宜楼」という雅称を思いついたのではないか? 「四時総宜之楼」とは春夏秋冬いずれの季節でも結構な旅館だというところで、裏に「四時行楽せよ」という意を含む。概してこ

ういう即興的発想に詩仏の才気がひらめくが、これは素晴らしい思いつきだった。第一に、文人趣味が流行していた當時、詩仏の題額を頂戴したとなれば、東屋に箔がつくし、第二に、「四時総宜之楼」の扁額を掲げれば、遠来の行楽客たちの目に留まって、客寄せにもなったからである。絵師・雪且もこの扁額を無視できず、挿絵に描きこんだわけである。いずれにしろ、文化三年以後、東屋自身も「総宜楼」と称するようになり、江戸の文人墨客も「総宜楼」あるいは「総宜亭」と呼ぶようになった。この扁額が与えた影響を軽く見てはならない。

ところで、右の四人はみな「清新性霊」の詩を作ったはずである。というのも、「清新性霊説」は緑陰の父・北山が先頭を切って唱えた説で、当時の詩人たちに強い感化を及ぼした詩論だからである。それは前時代（荻生徂徠・服部南郭など）の、ただ唐詩をまねるだけで現実味のない詩を排撃して、自分の真情を詩に詠え、という主張だった。^九これが強烈な反古典主義を標榜する詩説であったため、まず江戸の市河寛齋とその門下（大窪詩仏・菊池五山・柏木如亭など）が実作してみた。それが江都の詩壇に迎えられ、やがて江戸ばかりでなく、地方の詩壇にまで伝わった最新の詩説であった。

早い話が、右の四人はいずれも新時代の申し子なのである。その四人が打ちそろって総宜楼につどい、新しい詩を作り合つたとすれば、江戸の翰墨界に評判が立たないわけがない。簗木清方が見たという鵬齋・抱一・文晁などの書画が、総宜楼に残されたゆえんだらう。

そもそも東屋なる旅亭からして「文化三年以前」にできた新時代の産物だったのである。

話題を変えよう。

文化三年三月四日、江戸は大火に見舞われた。詩仏も焼け出されて、仮住まいの窮屈に音を上げた。そこで再起をはかるため、友人の銅雲泉（画家）とともに遊歴の旅に出た。言うまでもない、潤筆料稼ぎが目的である。同年四月のことで、吟詠も即吟なら行動も即行、なにしろ事を運ぶに敏である。

一般に化政期の特徴は、中央と地方を結ぶ交通が四通八達し、人の往来が頻繁になるとともに、文化（詩書画・俳諧・囲碁・煎茶・古琴・篆刻など）の流通が盛んになったということである。中央の然るべき人が田舎くんだりまで出て、詩酒会・書画会・俳諧興行などを開くのは、なにも珍しいことではなかった。とりわけ一代の詩宗・大窪詩仏などは、地方に出かけては大儲けした文人である。その人気たるや方々で絶大であった。おかげで同じ年の秋、帰府がかなって神田お玉が池に新居（詩聖堂）を築いた。素早い復興である。

おそらく新居落成後だろう、桐生の詩人・佐羽淡齋が詩仏らとともに、金沢八景に遊び、総宜楼に投宿している。いよいよ淡齋の登場であるが、その人物事蹟はしばらくおいて、まずこのときの作と思われる詩二首を引用しよう（ともに後述する『淡齋百律』所収）。

金沢道中

「経過窈窕又崎嶇、野趣村情無処無、能見堂中煮香菌、総宜楼上斫鮮鱸、風流畢竟為何物、好事必須属我徒、頼是同遊有工画、蕭閑写得六賢図」（本詩では「総宜楼」に作る）

金沢総宜亭

「銀鱸紅蟹眼偏明、況有村醅香味清、坐客拌來鯨海飲、傍人扶得玉山傾、蒙鬆眠自醉時熟、冷淡詩於醒後成、不識双橋殘夜雨、夢中喚作退潮声」(本詩では「総宜亭」に作る)

「金沢道中」の注記によると、同遊者は大窪詩仏・山本緑陰・糸井君鳳(儒者、北山門下)・木百年(詩人、柏木如亭の弟子)・喜多武清(画家、谷文晁の一門)で、このとき武清が一行六人の「六賢図」なるものを描いたという。東屋すなわち総宜楼における席上の染筆であろうか? これだけの名士揃いだから、書画会筵でも催したのだろう。ただの設宴吟咏ではあるまい。先にも述べたように、江戸後期は書画の会などが各地で頻りに行われた時期で、文人墨客の有力な収入源だったという事実から、そう考えたほうが自然である。

右の二首を読むと、ともに同年秋の作だということが分かる。「鱸」も「蟹」も秋が旬の食べ物だからである。まず「鱸」は「張翰適意」(蒙求)の故事で名高い。晋の張翰は不羈曠達の才人で、秋風が吹き始めると、急に故郷の料理「蓴羹鱸膾」の味が恋しくなったので、官を捨てて帰郷したという、あの話であるが、小さい頃から『蒙求』で漢文を叩きこまれた江戸の文人には周知の談柄にすぎない。また「蟹」についても、清初の風流才子・李漁が大の蟹好きで、秋に蟹を買うための貯えを「買命錢」と名づけ、九月十月を「蟹秋」と称したということは、江戸の文人ならば『間情偶記』(巻十二・飲饌部)によって承知していた。さらに「瀬戸秋月」の勝目から言っても、秋の作である方が望ましい。

とくに「金沢総宜亭」の七律は「平淡」を最上とする詩仏のお眼鏡に適ったようである。それで十六年後の文政五年の冬、この七律(詩仏書)を刻した石碑をわざわざ総宜楼の庭内に建てたほどである。しかし立碑には石材料や石匠に払う工賃など、高額な資金が必要である。おそらく金主は桐生の詩人にして豪商(絹買次商)の淡斎だったろう。

この詩碑は安政五年の瀬戸大火後、東屋の移転とともに洲崎へ移されたが、昭和三十年の廃業後、碑面の大半が破損したので、修復したものを琵琶島弁財天の脇に、再度、立て直したという。いちど拝覧にいったことがあるが、これが近年の改修に係るものだということは一目瞭然である。碑面がてらてら光つて、時代も苔もついていないからである。それに「双（雙）」が「隻」に作られている。あるいは修復時の間違いか？ 当時の漢詩人は「瀬戸橋」を「双橋」と呼ぶのが習わしだった。それが「隻橋」というのでは、あの二連の反橋の片方がなくなってしまうことになる。これでは詩にも絵にもならない。落胆させられた。

しかし、また新しい発見があつた。神奈川県立図書館に「武州金沢四時総宜之楼碑石図」という一枚物が所蔵されていたのである。これは木版藍刷（三六×二四センチ）の図で、おそらく世の中に、たった一枚きりしかないはずである（今のところは）。

まず図の上辺に「楼上扁額」として、例の大窪詩仏揮毫の扁額が上せられている。「縦一尺二寸×横六尺」という大きな額で、「四時総宜之楼」とあり、自題に「文化丙寅春与／緑陰米庵竹庵／同宿此楼因書／而与之／詩仏居士印」とある。実物の扁額と同文である。

また右辺に目を移すと「建前碑石／高さ六尺余／巾三尺余／一字枰方二寸三分」とあり、その下に「石上二仮名ナシ今読ミヤスカラン為ニ／之ヲ付ス」とある。（右下に誰やらの蔵印があるが、逆さに捺されているのでお話にならない）図の中心にあるのは、くだんの詩碑をそっくり引き写したものの。詩題が「題金沢総宜楼」と改められ、「金沢総宜亭」に「村醜」とあるのが「邨醜」と直されたのは、師の詩仏の筆削によるものだろう。

さらに左辺下には、「武州金沢／総宜楼／東屋蔵版」とあつて、これが当店宣伝のために刷られたものだということ

が分かる。引札とすれば文雅なものに属する。あるいは詩碑建立のお披露目の刷物か？ しかし、いつ発行されたものか、何枚刷られたものか、皆目分らない。(立碑の文政五年十月以後のものであることは確かだが)

当の碑文は、一字一字が原稿用紙のような升目に収まっているが、以下のとおりである。

銀鱸紅蟹眼偏明況有邨醅香味清坐客

拌來鯨海飲傍人扶得玉山傾蒙鬆眠目

醉時熟冷淡詩於醒後成不識雙橋殘夜

雨夢中喚作退潮聲

此上毛淡齋佐羽芳題金澤總宜樓之詩

也余愛其平淡有趣爲書上石立諸樓之

傍文政五年歲在壬午冬十月詩佛老人

大窪行記

廣群鶴鐫

右のとおり、詩が淡齋、書が詩仏、石工が広群鶴という顔ぶれである。広群鶴は五世か六世か？ あるいは共同制作か？ いずれにしても、一と言って二とない江戸の石匠である。(淡齋はこの広群鶴に鐫刻をたびたび依頼している)。この三者の名声にあやかろうとして、東屋は右の一枚刷を板行し、泊まり客などに配ったものと思われる。繰り返すが、狙いはずばり広告である。江戸の大衆はこういう三役揃い踏みのような賑やかな印刷物を愛好したからである。

ところで、大衆にこんな漢字づくめの詩文が読めたかというところ、総宜樓に泊まるほどの客なら、なんとか読めただろう。この刷物には「石上二仮名ナシ今読ミヤスカラン為ニ之ヲ付ス」という配慮がなされているからである。右の傍

らに片仮名の読み仮名と送り仮名が振られ、左の傍らに返り点が施されているので、それに従って訓読すれば、一知半解ながら呑みこめたはずである。こういう訓読の方式はお神籤から商売往来にいたるまで広く用いられていたものであるし、江戸時代の驚くべき識字率から考えて、すべてとは言わないが、かなりの人が読めただろう。たとえ分からなくても、口に唱え耳に聴く朗唱の快楽を、江戸の人たちは承知していた。朗唱するうちに、「総宜楼は新鮮な鱈と蟹の料理を出してくれるし、田舎酒だが味がいいので、みんなで鯨飲して、つい酔態を演じてしまった。仲間が介抱してくれたので、眠りかけているうちに、ぶるぶるっと眼が醒めたら、酔い覚めに詩が一首できた。知らぬ間に明け方の瀬戸橋に雨が降っている。ごうごうと音を立てて、あの反橋の下を引潮がひいていく。その音を夢の中で聞いていた」というくらいの詩意はつかんだだろう。

余談ながら、文化三年の江戸大火後、淡斎は中村・市村・森田の三座の勧進元となって、桐生織物の宣伝に利用したという。^二これは佐羽家に伝わる口碑のようで、年代や期間などは未詳だが、もしこれが本当たとすると、この刷物を読んだ泊まり客は、あの桐生のお大尽の詩か、と唸ったに違いない。歌舞伎はもう一つの江戸の花だから、芝居の勧進元の声名が文政五年に消えていたとは思えない。

四

先を急ごう。

淡斎は安永元年、上毛の桐生に生まれた。その人物事蹟については朝川善庵撰「桐生故詩人佐羽淡斎君墓記」^三（広群鶴刻）が最も詳しい。善庵は山本北山門下で、当時、徳行を以て称せられた鴻儒である。その「墓記」によると、「君姓

佐羽、諱芳、字蘭卿、号淡斎、其堂曰菁莪」という。家は父祖の代より絹を商つて富み栄えた。三十九歳の時、淡斎は初代の後を継いで二代目吉右衛門を名乗り、事業を拡張して、上州随一の富豪となった。俚諺に「一佐羽、二加部、三鈴木」と謳われたほどである。淡斎は貨殖にも長けていたが救恤にも熱心で、利益を独占せず広く困窮者に施したという。善庵が「良賈」「義人」と呼ぶゆえんだが、じつは自身からして金銭的援助を受けていた。若い頃、善庵は儒一本で身を立てようとしたものの、たちまち行き詰まって食うにも事欠いた時期がある。その貧儒生に毎年二十両ずつ送りつづけたのが淡斎であるという。しかし、このことはどういふ入り訳があつたか、「墓記」には書かれていない。

淡斎は地方の絹買次商に生まれながら、資性聡明、早年から詩作に熱中したらしい。中央の文人で最初にその詩才を發掘したのが、亀田鵬斎である。『菁莪堂集』（後述）の鵬斎序にいう——享和元年に、上毛を訪れたときのこと、桐生は絹で栄える都邑であるのに、詩文を解するものは淡斎（当時三十歳）一人きりだった。その頃はまだ前時代の擬唐詩を作っていたが、その後、「都下の詩伯」と交流して、新時代の清新性靈の詩を作るようになった、と。「都下の詩伯」とは大窪詩仏・市河寛斎・山本北山・菊池五山・柏木如亭などを指す。当然のことながら、これらの詩伯に教えを乞うには束脩が必要である。おそらく気前のいい淡斎は過分な指導料を払ったことだろう。詩伯たちの格別な眷顧を受けているから、そう言うのである。

例えば五山の漢詩時評集『五山堂詩話』卷二（文化五年刊）に初めて登場し、「桐生佐羽芳……家道甚豊、而性好吟咏。余再四相逢、未知其詩。頃、詩仏見投其一冊、因擷読之。亦能得宋元風趣者」と紹介された。また例えば詩仏の別集『詩聖堂詩集初集』（文化七年刊。十卷三冊）の每巻劈頭に著者名と並んで、「上毛 淡斎佐羽芳蘭卿 校」というふうに校定者として記名された。両書とも当時のベストセラーだったので、その詩名は、一躍、広まったはずである。ち

なみに揖斐高氏の「化政期詩人の地方と中央」によると、全『五山堂詩話』（正編十卷補遺五卷）中、採録された淡齋詩は二十五首にもほり、地方の素人詩人としては破格の数だという。五山も詩仏も銅臭を帯びた文人だったということは森鷗外の『寿阿弥の手紙』に生々しく書かれているが、このことから推して考えると、両書の出版には淡齋の経済的な助力があつたに違いない。ありていに言うと、淡齋は江戸においては積極的に文化的パトロンの役割を演じ、かつ文化的パトロンとして都下の詩伯の間で認められていたのである。

その詩業についていうと、別集に初編『淡齋百絶』（文化六年刊）、二編『淡齋百律』（文化十年刊）、三編『菁莪堂集』（文化十二年刊）がある。以上の三集をまとめて『淡齋詩集』という。この他にも桐生の同人の作を集めた『桐郷風雅集』（享和二年刊）と『桐生才子詩』（文化十年刊）の総集の完成に与つて力があつた。（淡齋はこの両集発刊の際、北山門下の斎藤天籟を招聘し、桐生詩壇の育成に努めた。その結果、文化十年、翠屏吟社が結成された）

詩風はというと、清新・平淡な宋詩風のもの。淡齋はまた『宋三大家絶句箋解』（文化九年刊）、『宋四霊詩鈔』（文化十二年刊）の刊行にも関わっているが、南宋の三大家（陸・范・楊）よりも、永嘉の四霊（徐靈暉・徐靈淵・翁靈舒・趙靈秀）の詩風に似る。南宋後期の苟安に甘んじた四霊は、身辺の些事に材を取り、賈島・姚合の苦吟の創意に学んで、もっぱら白描の手法を用いたが、なかならず桐生における淡齋詩は、そういった四霊の作風に近いのである。

家業だけでも忙しいのに、業余、暇を盗んでは、これほどの詩業を達成したのだから脱帽するほかない。ときに本業を蔑ろにするほど詩に淫したという結果^{一七}だろう。おまけに琴棋書画の嗜みもあつたらしいし、そればかりか吉原通いにもぞつこん熱を入れた男で、『墓記』に「或又偃紅擁翠、結綺夢於巫山。傾銀注玉、捲白波於鯨海、南樓弄月、不知漏之已尽。北里賞花、深惜春之将残。其丰神清爽、性度快豁、人皆為烟花總管、君自謂風月主人。吾知其為風流人豪矣」と

いう。だいたい謹厳たるべき「墓記」に、こういう故人の麗々しい艶福ぶりを記していいものだろうか？「烟花の綵管」「風月の主人」とは、要するに金釵十二の旦那ということである。いかにも中国の煙粉小説に出てきそうな俗な言い方で、そもそも儒者の忌み嫌う言葉ではないか。徳行の学者・善庵でさえ「風流人豪」と認めざるをえないほど吉原に流連荒茫したということなのだろう。だいいち男前で、気っ風がよくて、金離れがよくて、おまけに風雅も解すれば、女に持てないはずがない。それでいて『淡齋詩集』には妓情を詠う詩は意外に少ない。これほど身近な詩材もないはずなのに、「桐生竹枝」第一首（『淡齋百絶』）、「閨情」（『淡齋百律』）、「宿金沢聽雨」「宮詞」（『菁莪堂集』）くらいしか見当たらない。なぜだろう？ 都下の詩伯・市河寛齋の『北里歌』、柏木如亭の『吉原詞』、菊池五山の『深川竹枝』等の遊里詩の盛名に対し、地方の商人らしく分を弁えて遠慮したためだろうか？ 化政期は右の艶詩集を迎えるような世の中だった。とすると、儒者撰文の「墓記」中の艶冶な文飾も、怪しむに足りないのかもしれない。

淡齋はまた富家の常として普請道楽にも入れこんだ。まず江戸に別邸を構える（文化初年か）。これは今の墨田区某所にあつたらしく、吉原・深川の両艶跡に繰り出していけるところだったといふ。^{一九}ついで吉原に水路で通えるように屋形船まで造船する。善庵・詩仏・五山などの雅客を乗せて隅田川に浮かび、船遊びの快を味わいつつ、北里へ大尺遊びとしゃれこんだわけである。さらに文化十年、桐生の小倉山に「十山亭」という別荘を築いて風流高逸の士を招待した^三り、文政七年には、自詩五首を勒した「十山亭詩碑」（広群鶴刻）を立てたり、翌年には自邸の後ろの山を買って梅数百株を植えて、季節になると観梅を楽しんだり、多趣味といえは多趣味な美的生活に耽つた。

ところで梅といえは、佐原菊塙の新梅屋敷（今の向島百花園）である。よく淡齋の人脈の広さを示すのに、『惜花帖』が引き合い出されるが、これは文化九年に淡齋の長兄・竹翁が他界し、その追悼のために淡齋が編輯した詩画集で、当

時の錚々たる文人墨客三十六名が詩・書・画を寄せている。社交家・淡齋の面目を窺うに足る一巻である。しかし、ここでは菊塙が出版した『盛音集』（文化元年刊）に注目したい。この総集は江都で知られた名流百余名の詩を集めたもので、淡齋詩も一首、採録されている。これは菊塙との交際が開けたことを意味しよう。^{三三}ある記録によると、菊塙は「奥州仙台の人なり。天明年間江戸に來り、中村座芝居茶屋和泉屋勘十郎に召仕はれ、平蔵と改む。斯て十年許の間に蓄財し住吉に骨董店を開き、北野屋平兵衛と稱す」という。して見ると、菊塙は一介の男衆から骨董屋に成り上り、ついには花屋敷の主人に収まったということである。芝居茶屋というところは一風流ありげな士女のひしめく場所で、もちろん光もあれば影もある「悪所」にはかならない。男衆時代の菊塙がここで身につけたのは人間の表裏を見ぬく眼力だろう。よく『盛音集』は売名的出版だと言われるが、それにしても中央の市河寛齋・大窪詩仏をはじめ、地方の佐羽淡齋・木百年にいたるまで、名士百余人もの知遇を得たものである。菊塙という男は骨董の目利きであると同時に、強かな人間の鑑定家でもあったらしい。いったい菊塙に淡齋とは、お誂えむきの取り合わせではないか。ともに巨利を博した商人で、ともに社交術に長け、ともに梅好きだから、同気相求むところがあつたに違いない。淡齋は墨田区某所に別邸を造作したり、屋形船を新造したり、郷里の山に梅林を造成したりしたが、そういった道楽の指南役は、どうも、この菊塙だつたらしい節がある。確証はないが、淡齋が江戸の芝居小屋三座の勸進元になつたのも、この世界に通じた菊塙の手引きがなければ出来ない相談だつたのではないか。

五

元來、淡齋は山水優遊を好んだが、その幽人山客ぶりは一通りではなかつた。都下の詩伯たちもこれには舌を巻いて、

「烟霞の痼疾」と目するほどだった。例えば善庵の「墓記」はいう。

「性好山水、癖耽烟霞、吉野嵐山之花、須磨明石之月、金華之靈妙、日光之佳麗、松島天橋之以勝頭、妙義榛名之以奇名、其他靈境奇跡……探討必窮。……又名山勝地、所到輒立詩碑。每謂人曰、吾一生之間、必当立百碑以存遊踪矣。其所立、僅至十一而沒。惜哉」

淡齋は全国各地の名勝という名勝を尋ねまわって、そのつど詩を題した。それが積もり積もって百首になったという。そこで、百首を次第に勅して詩碑百基を立てようという大望を抱いた。こんどは建碑道楽の始まりである。ところが惜しいかな、十一基まで立てたところで病卒。(実は十基で、そのうち松島詩碑の所在は不明だという)。この十基立石の詳細は他著に譲ることにして、ここでは文政五年の建碑に限って、ざっと見ておこう。

詩仏老人画竹碑 詩仏画竹と淡齋題詩を刻したもの。今は墨田区向島百花園内にあり。

江島詩碑 淡齋自作の詩を刻した「百碑」中の第一碑。修復されたものが神奈川県江島の島に立つ。

墨多三絶碑 淡齋の七絶三首を石刻したもの。墨田区白髭神社内に現存。

金沢総宜楼詩碑 これについてはすでに述べた。

右の四基を一年間に建てたというのだから尋常ではない。出費もずいぶん嵩んだことだろう。あるいは淡齋没後の佐羽家の衰微の始まりも、一つはこの道楽に起因してはいないだろうか？

このように詩酒三昧・道楽三昧の日を送っているうちに、ふと自省がきざすときがあった。『葺我堂集』に「自笑」という七絶がある。分別盛りの四十路に近づいた頃の感懐である。

百年畢竟是行旅 百年、畢竟、これ行旅

俣付菴騰夢一場　すべて付す、菴騰、夢一場

人生は旅だ、夢だ、というのである。淡齋は一介の商人に安着することを知らない性分で、一生は商用・遊学・行楽・探勝といった繁忙な行旅のうちに過ぎた。旅中作の多い所以だが、それは雅客の詠であつて、窮士の吟ではない。

その溫柔秀雅の人となりは『淡齋詩集』中の「幽居」「村居」「村飲」「春遊」「梅」などに滲み出ている。秀作であると言つていい。しかし、さして名吟とも思われぬ「金沢総宜亭」が石刻されたのはなぜか？　どうも世間一般の受けを狙つた詩仏の憊漚によるものようだ。「総宜楼」という雅称について、文化三年の春頃、淡齋が東屋の万端のサービスに感服して、結構づくめの旅館だと賞賛した上での命名だという人もいるが、これは根拠に乏しい説である。たぶん風雅の趣向に長じた詩仏の案出によるものだろう。「四時総宜之楼」の書も詩仏お得意の席上揮毫で、旅亭東屋の宣伝に一役買って出たものと見た方がよさそうである。それはそれとして、総宜楼の詩碑は淡齋にとって自慢の一碑となつたに違いない。

文政八年秋のこと、さしもの「風流豪人」も病没する。享年五十四。おそらく大酒がもとの病氣だろう。淡齋詩には飲酒の詩が目立つので、そう言うのである。文化三年の秋に、例の総宜楼で鯨飲したのは、淡齋三十五、詩仏四十のころである。病床に着いて、付き合ひ酒のたたりだと後悔しかもしれないが、本望でもあつたらう。しかし、百基を立石して我が遊踪を後世に残さんとした大願は、見果てぬ夢となつた。こればかりは無念だつたらう。

生前、淡齋が情熱を傾けた文化事業を継承するものは身内にもいなかつた。やはり百碑建設には莫大な資金と時間が必要だつたからだろう。天保二年十月、渡辺崋山が桐生を訪れた際、小倉山の十山亭を見物にいつたが、建物は荒れ果てて、十山亭詩碑も要害山に移されていたといふ^{三五}。十山の景を四窓に集めたといふ、数寄を凝らした別墅がなぜ手もな

く荒廢したのか？ それは何といつても、佐羽淡齋という中心的存在の喪失によるところが大きいだろう。

明治三十年のある日、伊藤博文が東屋の客となった。これより十年ほど前、憲法の草案を練るために閉じこもった馴染みの宿である。きれいに手の入った広い庭に下りてみると、たまたま例の詩碑が目にとまった。高さは六尺余もある。伊藤は明治漢詩の大家・森槐南を師として、政務の間に吟髭を捻るほどの韻士である。ふと詩魂が動いて碑刻の淡齋詩に唱和した。「遊金沢、宿四時総宜楼、庭有大窪天民所建上毛佐羽某詩碑、即用其韻」（藤公詩存）という一首が、それである。何かしら故人の淡齋に対して親和を感じたから応酬したのである。しかし佳汗清唱とは言いがたい。よつて、ここに引用しない。それにしても「上毛佐羽某」の「某」はなかるう。雅号をもつて呼ぶのが礼儀である。

今日、東屋は明治憲法が起草された旅館として名高い。それを記念して、現第一生命ビルの近くに「憲法草創之処」という碑が立っている。立地がいいから、まず人目を引く。それにひきかえ、江戸の文人たちが雅筵を開いた総宜楼のくだんの詩碑は——「隻橋」という過ちを刻みながら——琵琶島弁財天の木立の影に隠れて、人に顧みられること稀である。

平成の今日、桐生の詩人・淡齋佐羽芳の名を知るものは、いよいよもつて少ない。

〔付記〕

- 一、本稿の引用文の漢字は、総宜楼の詩碑の碑文以外は、すべて現代通行の字体に改めた。
- 二、本稿を書くにあたって、金沢八景および総宜楼に関する資料については神奈川県立図書館の方々に問い合わせること度々だった。また佐羽淡齋に関する資料はすべて桐生市図書館の方々に複写していただいた。大変ご厄介をかけた。ここに記して感謝の言葉を申し上げたい。
- 三、本稿は主として、先行研究の中で最も優れた揖斐高氏の「化政期詩人の地方と中央——佐羽淡齋を中心に——」（『江戸詩歌論』汲古書院 一九九八年 所収）に拠っている。なお「大窪詩仙年譜稿」（同上）も参照した。学恩を蒙ったことに対して深謝の意を表したい。

【注】

- 一 平田恒吉『金沢と六浦時代』（熊野屋商店 大正三年）によると、「金沢八景詩歌卷」一軸が能見堂に所蔵されていたが、明治初年に堂宇の焼失とともに烏有に帰したという。
- 二 『蕉風復興運動と蕪村』（岩波書店 二〇〇〇年）所収。
- 三 同右。
- 四 「武州金沢能見堂とその出版物について 上・下」『金沢文庫研究』第二十一巻第四、五号（神奈川県立金沢文庫 昭和五十年）所収。
- 五 石川英輔・田中優子監修『原寸復刻 江戸名所図会』上（評論社 一九九六年）
- 六 例えば佐羽淡齋の「宿金沢聴雨」『善我堂集』に「纒出城中歌吹海」とある。
- 七 『武相名所旅絵日記』（鹿島研究所出版会 昭和四十九年）原色図版五十六枚、原寸大複製。
- 八 『旅絵日記』第五十六景に「めて度江戸着／以上略図／立斎戲筆」とある。
- 九 山本北山『作詩志藪』天明三年刊（『日本詩話叢書』巻六 龍吟社 大正九年）所収。
- 一〇 森鷗外『寿阿弥の手紙』（『鷗外歴史文学全集』巻四 岩波書店 二〇〇四年）所収。

- 一 佐羽秀夫『桐生の歴史を語る』（桐生ロータリークラブ 平成二十一年）
- 二 「墓記」は桐生市の浄運寺内にある。いちど撮影にいったことがある。
- 三 注一一に同じ。
- 四 渡辺華山『毛武遊記』（芳賀登編『崑山全集』第二巻 日本図書センター 一九九九年）所収。このことについて淡斎の弟・蘭溪や子の秋香が不満を述べたという。
- 一五 本書は詩仏・緑陰編『宋三大家絶句』に淡斎が箋注を施したもの。
- 一六 趙平校点『永嘉四靈詩集』（浙江大学出版社 二〇一〇年）
- 一七 「予耽吟詩、動廢家務。有人痛禁之者。有感、戲述」『淡斎百律』
- 一八 鴛湖烟水散人著『女才子書』（馬蓉校点 春風文芸出版社 一九八三年）の「自叙」に、「予乃得為風月主人、烟花総管、検点金釵、品題羅袖」とある。磯辺彰「関于日本江戸時期諸藩及個人文庫烟粉小説的収蔵状況」によると、『女才子書』は江戸に舶載されていたという（『中国古代小説研究』第四輯 人民文学出版社 二〇一〇年）所収。
- 一九 注一一に同じ。
- 二〇 「新造遊舫」『淡斎百律』。「佐羽淡斎製遊舫一艘、中貯琴書酒茶及釣魚之具、予為名曰小天隨、又係之以詩云」『詩聖堂詩集初編』卷五。『善庵詩鈔』上にも同様の作あり。
- 二一 「癸酉孟冬構十山亭于小倉山上。適与詩仏先生同遊」『菁莪堂集』
- 二二 「去年甲戌買後山而栽梅數百株。今年乙亥花尽開、喜賦」『菁莪堂集』。
- 二三 「遊菊塢梅園似五山先生」『淡斎百律』
- 二四 東京市編『東京市史稿 遊園篇第二』（東京市役所 昭和四年）「花屋敷」所載の「野辺白露」坂田篁蔭の著か？
- 二五 注一四に同じ。